

夜の鹿

津木林洋

温泉に行くため、彼の車に乗って夜の山道を走っていた。

突然ヘッドライトの中を右から茶色の影が走り抜けた。急ブレーキが掛かる。シートベルトをした上半身がぐんと前に倒れたと思ったら、また茶色の影。衝撃があつて、車は急停止した。

彼があわてて飛び出す。彼女もシートベルトを外して外に出た。

「あーあ、新車なのに」

彼が左側のヘッドライトを見ている。

目をやると、カバーが割れ、車体が凹んでいる。ヘッドライトの光が切れる辺りに茶色の物があり、彼と一緒に近づいていく。子鹿だった。目を見開いてぴくりともしない。

「こいつのせいか」

そう呟くと、彼は車に戻った。彼女も戻ろうとして顔を上げた時、道脇の暗闇に光る二つの点を見つけた。母鹿に違いない。じっと見詰めたが、その目は動こうとはしない。

彼はスマホで凹んだ部分の写真を撮っている。

「その鹿、こっちに引っ張ってきてよ。一緒に撮った方が保険会社に説明しやすいから」

「いやよ」

やっぱり気持ち悪いかと呟きながらこちらに來ると、彼は子鹿の脚をつかんで引きずっていった。それを凹んだ箇所の下に置いて写真を撮った。

再び車に乗って動き出した時、道脇を見たが、光る目はどこにもなかった。

「轢いたのが人間だったら、どうしたの」

「119番に決まってるだろ」

「そう」

「何だよ、俺が何か悪いことをした？俺は何もしてないよ」

母鹿の目が彼女を捉えて離さない。彼女はいつ車を降りようかとばかり考えつづいた。